Certificate Programme on Nature Conservation

自然保護寄附講座

Newsletter

No.1
May 18, 2015

修了生第１号の声
修了生第１号、海老原満さんより

2014年度自然保護寄附講座の感想
１期生より、2014年度の感想をいただきました

インターンシップ体験談

授業レポート

実習レポート

教員紹介

筑波大学
University of Tsukuba

自然保護寄附講座開講のねらいと平成 27 年度の計画

筑波大学大学院人間総合科学研究科世界遺産専攻と生命環境科学研究科は、個人の篤志家からのご寄付をいただき、平成 26 年度から自然保護寄附講座を開講しています。自然保護寄附講座は、大学院生を対象とした自然保護サーティフィケートプログラムと自然保護に関する研究プロジェクト、公開講座・公開シンポジウムからなっています。

自然保護サーティフィケートプログラムは、自然と文化にまたがる学際的な知識と国際的な経験をもとに、自然保護に関する国際機関、国内機関、国際援助機関等で活躍する人材を育成することをめざして、大学院の専攻の単位に加えて、自然保護に関する授業、実習に関する単位を取得し、インターンシップ経験をすることにより、修了時に修了証明書（サーティフィケート）を授与するものです。

平成 26 年度は、自然保護論、地球環境論、保護地域管理論、景観・緑地保全論、生物多様性論、野生生物管理論、モニタリング調査技術などサーティフィケートプログラム独自の 授 業、International Conventions for Environment, Role of International Organizations and NGOs など英語による授業、陸域フィールド実習、海域フィールド実習、自然遺産実習などの野外実習を開講しました。また、生態系の保全と復元、環境アセスメント、自然保護法制度、自然保護教育と環境教育については、公開講座として開講し、つくば周辺の市民の方が参加されました。また 4 月と 11 月には、つくばと東京で公開シンポジウムを開催し、地球環境問題の動向、世界遺産における自然と文化の融合などについてディスカッションを行いました。

平成 27 年度は、これに加えて、自然保護セミナー、インタープリテーションとエコツーリズム、保護地域・野生生物管理実習などの新たな授業と実習を開講するとともに、IUCN（国際自然保護連合）、ユネスコ、国内の自然保護団体等へのインターンシップについても本格始動させたいと考えています。また、新たに国際交流協定を結んだオーストラリアのタスマニア大学との交流を活発化させ、Project Practice in Natural Heritage などの実習でタスマニア大学を訪れる予定です。

平成 27 年度は、自然保護寄附講座発展の年と位置づけ、担当教職員一同、力を合わせてまいりたいと存じます。

筑波大学大学院人間総合科学研究科
世界遺産専攻　教授
吉田 正人

自然保護寄附講座 2015 年度開講科目一覧

2015 年 5 月 18 日現在

科目番号	科目名	単位	年次	学期	曜時限	教室	担当教員	備考
授　業								
02JZ001	自然保護論	1.0	1- 5	秋 AB	木 2	春日プラザ	吉田正人	
02JZ002	地球環境論	1.0	1- 5	秋 AB	集中	2D206	指田勝男ほか	要望があれば英語で授業
02JZ003	保護地域管理論	1.0	1- 5	秋 AB	火 3	総合 A205	伊藤太一	
02JZ004	景観・緑地保全論	1.0	1- 5	春 C	集中	春日プラザ	伊藤弘、黒田乃生	7 月 1 日～ 3 日
02JZ005 =01EC538*	自然遺産論	1.0	1- 5	春 AB	木 2	春日プラザ	吉田正人	
02JZ006	生物多様性論	1.0	1- 5	秋 AB	水 2	春日プラザ	佐伯いく代	
02JZ007	Wildlife Management(E)**	1.0	1- 5	秋 AB	火 4	総合 A205	佐方啓介	英語で授業
02JZ008	モニタリング調査技術	1.0	1- 5	春 C	集中	総合 A205	和田茂樹、武正憲	7 月 7 日～ 8 日
02JZ009 =01AD432*	植生学	1.0	1- 5	秋 B	火 1,2	理科 C103	上條隆志、川田清和、清野達之	
02JZ010 =01AD318*	Vegetation Science(E)**	1.0	1- 5	秋 A	火 1,2	理科 C103	上條隆志、川田清和、清野達之	英語で授業
02JZ011 =01AB827*	Access and Benefit Sharing of Genetic Biodiversity(E)**	2.0	1- 5	秋 AB	金 1,2	生農 G501	渡邉和男	英語で授業
02JZ012 =01EC547*	International Conventions for Environment(E)**	1.0	1- 5	秋 B	集中	春日プラザ	吉田正人、稲葉信子、外部講師	英語で授業 12 月 18 日～ 19 日 香坂玲氏・堀江正彦氏
02JZ013 =01EC548*	Role of International Organizations and NGOs(E)**	1.0	1- 5	春 B	集中	春日プラザ	吉田正人、稲葉信子、外部講師	英語で授業 5 月 30 日～ 31 日 James Thorsell 氏
02JZ014 =01EC549*	International Cooperation for Environment(E)**	1.0	1- 5	秋 B	集中	春日プラザ	吉田正人、稲葉信子、外部講師	英語で授業 11 月 19 日～ 20 日 Natarajan Ishwaran 氏
02JZ015 =01EC550*	Citizens' Participation for Environment(E)**	1.0	1- 5	秋 C	集中	春日プラザ	吉田正人、稲葉信子、外部講師	英語で授業 2016 年 1 月 28 日～ 29 日 Kai Weize 氏
02JZ016 =01EC551*	Environment and Sustainability(E)**	1.0	1- 5	夏休み	集中	春日プラザ	吉田正人、稲葉信子、外部講師	英語で授業 9 月 26 日～ 27 日 Carolina Castellanos 氏
02JZ017	自然保護行政論	1.0	1- 5	秋 C	集中	春日プラザ	渡邉綱男(非常勤講師)	2016 年 1 月 23 日、30 日
02JZ018	自然保護法制度	1.0	1- 5	秋 ABC	集中	春日プラザ	佐伯いく代、外部講師	公開講座 11 月 7 日、28 日
02JZ019	環境影響評価	1.0	1- 5	秋 ABC	集中	春日プラザ	佐伯いく代、外部講師	公開講座 12 月 12 日～ 13 日
02JZ020	生態系の保全と復元	1.0	1- 5	秋 ABC	集中	春日プラザ	佐伯いく代、外部講師	公開講座 12 月 5 日～ 6 日
02JZ021	自然保護教育と環境教育	1.0	1- 5	秋 ABC	集中	春日プラザ	佐伯いく代、外部講師	公開講座 10 月 17 日～ 18 日
02JZ022	自然保護セミナー	1.0	1- 5	春 BC 秋 ABC	随時	春日プラザほか	佐伯いく代、佐方啓介、和田茂樹、武正憲	初回下田 6 月 13 日～ 14 日（1 泊 2 日） ほかはおってアナウンス
02JZ023 =01EC559*	インタープリテーションとエコツーリズム	1.0	1- 5	秋 B	随時	春日プラザ	武正憲	事前勉強会 11 月 12 日 エクスカーション 11 月 13 日～ 14 日
実　習								
02JZ101	陸域フィールド実習	2.0	1- 5	春 BC 秋 ABC	集中	筑波山・八ヶ岳 身近な自然と里山	上條隆志、佐伯いく代	筑波山（6 月 20 日）八ヶ岳（7 月 9 ～ 12 日） 身近な自然と里山（秋・随時）
02JZ102	海域フィールド実習	2.0	1- 5	春休み	集中	下田臨海実験センター	和田茂樹	2016 年 2 月 22 日～ 27 日（5 泊 6 日） 下田臨海実験センター
02JZ103 =01EC539*	自然遺産実習	2.0	1- 5	夏休み	集中	小笠原	吉田正人、佐伯いく代	9 月 1 日～ 6 日小笠原諸島父島 (5 泊 6 日（予定))
02JZ105	保護地域・野生生物管理実習	1.0	1- 5	夏休み	集中	南アルプスほか	伊藤太一、佐方啓介、武正憲	9 月 12 日～ 15 日（3 泊 4 日）
02JZ106 =01EC553*	Project Practice in Natural Heritage(E)**	2.0	1- 5	春休み	集中	タスマニア	吉田正人、佐方啓介	2016 年 3 月 1 日～ 3 月 8 日（7 泊 8 日） タスマニア島
インターンシップ								
02JZ201	短期インターンシップ	1.0	1- 5	通年	随時	国内外	佐方啓介	1 ヶ月未満
02JZ202	中期インターンシップ	2.0	1- 5	通年	随時	国内外	佐方啓介	1 ヶ月以上、3 ヶ月未満
02JZ203	長期インターンシップ	3.0	1- 5	通年	随時	国内外	佐方啓介	3 ヶ月以上、1 年以内

* コードシェア科目 (E)** 英語で実施

自然保護寄附講座では、講義 10 単位および実習・インターンシップ 5 単位（計 15 単位）を履修した学生に修了証明書（サーティフィケート）を授与します。

2014年4月に開講した、自然保護寄附講座「自然保護サーティフィケートプログラム」は、自然と文化にまたがる学際的な知識と、国際的な経験をもとに、自然保護に関する国際機関や国内機関、国際援助機関などで活躍する人材を育成することを目指したプログラムです。

プログラムのスタートから1年が経ち、履修生からたくさんの感想の声が届いています。記念すべきCPNCニュースレター No.1は、そんな皆さんの2014年度の総まとめをご紹介します。

修了生第1号の声

2014年度はじめての修了生となった、
海老原満さんから事務局にメッセージが届きました。

世界文化遺産学専攻1年　海老原 満

多くの方々に支えられている自然保護寄附講座を満ち足りた気持ちで修了できました。関係者の皆様、ありがとうございました。このプログラムの特長は、多様なActive Learningが用意され、意志あるところには道があることです。大学の先生方の他、外国からの専門家や自然保護関係者から直接体験談を聞く貴重な機会がたくさんあります。公開講座では、一般の方々とも交流できます。日本ばかりではなく、海外での自然遺産実習を体験することもできます。IUCN等、海外におけるインターンシップに参加している人もいます。

Think Globally, Act Locallyの観点で、私が「景観・緑地保全論」で学んだ自然と文化の融合的知識を紹介します。「里山と伝統的な生活」について、「変化しながら茅葺民家を守る」という「人間としてのしなやかさ」です。勁草ということばがあるように、しなやかでつよい人をinterpreterとして紹介していただきました。上野さんの解説を聴きながら、筑波山麓・八郷茅葺民家当主萩原さんと木﨑さんの関係者への感謝の気持ちと「受け継いだ茅葺を何とか次世代に残したい」強い思いを知ることができました。しかも、茅場が大学近くの高エネルギー加速器研究機構の敷地にあるなんて、本当に驚きました。私も景観・緑地保全の実践で茅葺民家とのかかわりをもっていきます。

2014年度自然保護寄附講座の感想

生物資源科学専攻２年　山崎 寛史

自然保護寄附講座の平成26年度プログラムでは、21講義(内４講義は公開講座)・４実習がカリキュラムとして開講されていました。私は、このうちの10講義・１実習の単位を取得し、国内でのインターンシップを現在行っています。

講義・実習は、どれも興味深い内容であり、自然保護寄附講座の「自然保護に関する国内・国外の機関で活躍する人材を育成する」という目標に沿ったものであると感じました。その中でも、国内外の研究事例や先生自身の研究経験をふまえながら、生物多様性がなぜ重要なのかということを遺伝子・種・生態系レベルで一つずつ詳しく学べることのできた「生物多様性論」、長野県にある八ヶ岳・川上演習林や静岡県にある井川演習林において、実際に植物を観察し、その見分け方や植物標本の作り方を覚えると共に、その植物がなぜそこに分布しているのかを地理的要因などから学ぶことのできた「陸域フィールド実習」、また一般の方も参加できる公開講座では、陸域・海域・河川・湖沼などの生態系における最新研究と今後の展望を研究者の方々から実際に聞くことのできた「生態系の保全と復元」が、特に印象に残っています。

今後は、自然保護寄附講座で学んだことをどのようにしたら活かせるのかを考え、行動していきたいと思います。

世界遺産専攻２年　井上 葵

自然保護寄附講座１年目を終えて率直に思うことは「楽しかった」です。もちろん楽しいだけではなく大変だったり、忙しかったりしましたが無理してでも自分の興味ある授業を全て取って良かったと思っています。

授業には通常授業、集中講義、学外に行く実習と様々な形式があり、内容も世界自然遺産から自然保護行政や環境教育など様々な角度から自然保護について学ぶことができます。私は文系出身で自然に関する勉強をしてきていないので授業についていけるか不安でしたが、先生方の授業は分かりやすく、実習でも生命環境の学生と協力して取り組めたので特に問題はありませんでした。

印象に残った授業はたくさんありますが、共通して感じたことは自然保護寄附講座を取らなければ出会えなかった人たちがたくさんいるということです。集中講義や実習でお世話になった外部講師には外務省、環境省の関係者だけでなく世界の第一線で働く方々がいます。また、公開講座ではつくば周辺に住んでいる環境に強い興味を持っている一般の方々と話す機会があり学生とは違った視点の話を聞くことができました。

自然の恩恵を受けずに生きている人はいないと思います。興味が無いとか文系だからといって敬遠せずにまずは学び、自分が自然保護にどのように関われるかを考えることが大切だと思います。

インターンシップ体験談

IUCN(国際自然保護連合)スイス本部

世界文化遺産学専攻１年　渡邉 真菜美

2015年２月よりスイスのジュネーヴ近郊にあるIUCN(International Union for Conservation of Nature=国際自然保護連合)の本部で半年間のインターンシップを行っています。所属するのは、世界遺産条約に関してUNESCOの諮問機関としての役割を統括するチームで、主に自然遺産の保全状況の審査および新たな世界遺産候補地の評価にサポートとして携わっています。業務は、公的文書の発送や国際会議への代表団派遣の準備など事務的な仕事から、保全状況の調査報告書のチェックなど批判的な視点が必要なものまで、多岐に亘ります。専門家会議や国際的な政策交渉に同席することもあります。調査報告書など多くの文書を読み込むことも必要です。

世界遺産条約の運営の実際や、条約の背後にある国や国際機関の複雑な動きがリアルタイムでわかり興味深く、また国際的なレベルで遺産保護、自然保護のために働いている人々の思いに触れる中で自分の考えも深まります。参加当初から頻繁に自分の意見や見方を求められ、そのために勉強することも必要で常に責任感や緊張感を感じますが、一方でインターン生でもチームの一員として尊重してくれるのを嬉しく思います。部署の垣根を越え、国やキャリア、専門性、年齢も様々な方々と交流が広がり、IUCN本部全体としてオープンな風土を感じます。

コミュニケーションの面で壁にぶつかることは多いですが、温かく見守ってくれる周囲の人々に感謝し、多くを学び筑波に持ち帰りたいと考えています。

くりこま高原自然学校

生物科学専攻２年　遠藤 愛

「君は1992年生まれか、リオの環境サミットの年じゃないか」そういうと佐々木代表は、サミット以降の自身の活動を懐かしむように語ってくださいました。持続可能な暮らし方を提案し実践し続けた方から聞くと、今まで学んできた自然保護をめぐる年表に一気に血が通ったように感じました。大学での学びと、雪深い山奥での学びがリンクした忘れられない思い出です。

私は宮城県のくりこま高原自然学校へ２週間滞在し、施設管理やお客様の対応などに携わりました。日々の雪かきや掃除だけでなく、子どもとの雪原探検や被災地見学も体験させていただきました。２週間という短い間でも、めいっぱい体を動かして、多くの方との出会いがあり、濃厚な非日常体験となりました。「想いをかたちにすることが、私たちのミッションです」自然保護というのは、このスタッフの方の言葉に尽きると思います。勉強するだけなら本を読めばいい。「いいね!」をクリックすれば応援した気分になれる。けれど自分はどう生きるのか。実践者の姿を間近にすることで、自然保護は常に思想ではなく行動によって達成されるものである、ということを改めて感じさせられるインターンでした。

最後になりましたがこのような機会を与えていただいた、くりこま高原自然学校、自然保護寄附講座の皆様に心より感謝申し上げます。

授業レポート

2014年度に行われた授業、「景観・緑地保全論」のレポートの一部をご紹介します。

景観・緑地保全論レポート

世界遺産専攻２年　福田 藍

現在、景観・緑地に関する法制度はいくつかある。法律で規制されることは景観・緑地保全において、開発を阻止することが可能となるなどある一定の効果があることは確かである。しかし、法に担保されて守られているだけの景観・緑地は本来の意味での景観・緑地保全とはいえないのかもしれない。私が授業を通して強く感じたのは、景観・緑地保全を考えることは、人や人が生きる社会と自然環境との関係性を考えていくことなのだ、ということである。時代や生活様式の変容にともなって、人や社会と自然環境との関係性が希薄になっている。そのために現代社会は、景観・緑地保全のためのさまざまな制度を必要とするのであるが、それだけに頼って守っていくのではなく、今の時代に合ったかたちで、人や社会と自然環境との関係性を築いていくことが大切であり、それが成り立っている空間こそが本来の意味での理想的な景観・緑地保全のすがたであると考える。

今回の授業では、八郷地区の茅葺き屋根の民家や茅場を見学させていただいたが、全国的には茅場の減少や葺き替えの負担などの問題から茅葺き屋根の保存はむずかしい状況にあるということであった。昔は、葺き終わった茅を肥料に使用したり茶畑に敷き詰めたりと屋根以外の様々な用途があり、茅がどこにでも生えていて、葺き替えも地域全体で行うものであったため家主の負担もそれほど大きいものではなかったという。

文化財として“モノ”が残っているということは最優先に重要なことである。しかし、茅葺き屋根が抱えている問題にもいえるように、文化財を単体として捉え保存するだけでは、その保存がむずかしくなってしまう場合がある。とくに人の営みと自然環境の密接な関係性によって生み出されたようなものの場合には、その文化財を取り巻く様々な事象とうまく関連づけられれば、その関連のなかで保護も自然と成り立つのだろう。昔はそれが自然と成り立っていたのであろうが、今求められるのはそのような仕組みを新たに作りながら維持していくことである。人間の生活する空間と自然環境を切り離してそれぞれを維持保存していこうとするのではなく、両者の結びつきを前提のものとしながら、とくに人の側から自然環境をどうとらえていくのかということが、景観・緑地保全の目指すところだと感じた。

実習レポート

陸域フィールド実習を終えて

生命環境科学研究科　西平貴一

2014年に行われた陸域フィールド実習は、筑波大学の農林技術センターが管理する八ヶ岳・川上演習林と井川演習林で行いました。この度、井川演習林について記述させて頂きます。

本実習は、井川演習林において、主に3つの項目(植物・砂防・動物)により行われました。1つ目は、植物の種の多様性を体験的に学ぶことです。上條先生と佐伯先生の指導の元、井川演習林内に生育する植物を採取し、植物の見分け方(同定)について学び、最終的に植物標本(43種)を作製しました。井川演習林の他、県民の森、千頭に行き、標本となる植物の採取と共に、標高差(気候の変化)により生息する植物種が変化することを体験的に学びました。上記3地点は標高順に、県民の森・山伏山(山頂2014m)、井川演習林(900m～1500m程度)、千頭(300m程度)と並べられます。「県民の森」山伏山は山頂2014m地点に生息するトウヒやコメツガといった亜高山帯を代表する種を、演習林ではカエデ科の15種を初め、ブナ、イヌブナなど冷温帯を代表する種、千頭ではツブラジイ・アラカシなどのシイ・カシ類などを採取しました。

2つ目は、地形についてです。井川演習林では、大小様々な土砂崩れの現場を見ることができます。本演習林に勤務・

研究をされている砂防学の山川先生と技術職員の上治さんから講義とともに現地にて教えて頂きました。様々な微地形が構成する井川演習林では観測地点において、計測される降水量が異なると聞き、驚きました。また、演習林の実習中に、深層崩壊を起こした地形も見に行き、砂防について現地で勉強しました。岩盤が激しい地殻変動を受けて脆く崩れやすい地形であるため、間近で見ることができました。

3つ目は、野生動物と森林についてです。演習林の技術職員の遠藤さんから、森林のシカ被害について講義とともに現地において教えて頂きました。講義では、森林のシカ被害の現状についてとシカの管理のためとしての狩猟とその効果について学びました。現地では、動物による森林被害について痕跡を題材に、クマによる被害なのか、シカによる被害なのか等を学びました。

本実習は、夏休み期間に行いました。春学期に講義形式で学んだ知見をより深める機会であり、座学では得ることが難しい「自然を見る力・素養」を体験的に、五感を用いて学ぶ貴重な機会でした。

教員紹介

佐伯 いく代

出身：愛知県
専門：保全生態学

みなさん、こんにちは。佐伯と申します。講義では、生物多様性論という科目を担当しています。またほかの先生がたと分担で、自然保護セミナー、陸域フィールド実習、自然遺産実習、公開講座などを受け持っています。

わたしは自然保護寄附講座の教員ですが、ときどき、この講座の学生になりたいと思うことがあります。ときどきではなく、結構な頻度でそう思っているかもしれません。留学や海外インターンシップの話題が出るたびに、「私が行きたい・・・」と思ったり、カリキュラムの表を見て「全科目履修して自然保護の道を究めたい」などと考えたりしてしまいます。学生さんのための講座なのに、自分のことばかり考えていて、まったくもって不届き者です。

環境問題について考え始めたのは高校生のときでした。しかし周囲には、あまり関心をもっている友人がおらず、一人で本を読んだり、テレビを見たりして、断片的な情報からあれこれ勝手に思いをめぐらしていました。高校生だったときの自分がもしこの講座のことを知ったとしたら「ぜひ履修したい!」と思うような魅力的なプログラムにしたいなあと思っています。そして、受講してくれた学生さんが本当に「履修してよかったな」と思ってくれるものにできたら、なおのこと、嬉しいです。これから、自分と同じ関心をもつ学生さんが毎年のように入ってきてくれるのかと思うと、わくわくします。どうぞよろしくお願いいたします。

佐方 啓介

出身：奈良県
専門：Wildlife management

自然と人間生活の距離が遠くなりだした頃から、自然を「守る」ために過剰利用、過剰捕獲、生息域破壊の軽減をめざして人間活動の制限や保護区・天然記念物の制定など「保護」する対応がよく見られました。Wildlife managementというアプローチは、人間社会と自然の接触面で野生生物の保護や利用を含めた「管理」をします。日本では野生生物の「保全」「保護管理」「適正管理」などという訳語を用い、その概念を取り込む方法が模索されてきました。人間が活動する中で野生生物資源を最大限享受する必要性を認識したうえに立ち、野生生物の個体数や生息域のほか人による利用などを管理します。生物分野のみならず社会分野、倫理分野もまたがって幅広い視点から管理システムの構築や、必要とされる情報の精度・効率をあげる手法の研究をすすめています。

ミニクイズ：写真の動物のうち保護対象種は?駆除対象種は?
(答えはこのページ最下部)

武 正憲

出身：新潟県
専門：エコツーリズム、造園学

私は自然保護寄附講座の「インタープリテーションとエコツーリズム」を担当しています。この授業は、我が国で最初にエコツーリズム全体構想の認定を受けた埼玉県飯能市で行います。講義だけでなく、現地のガイドツアーに参加し、インタープリテーションを頭と体で理解するような演習型の科目です。行政担当者、地域コンサルタント、ガイド従事者という異なる立場から講師を招き、私の学術的見解に加え、現場で立場の異なる見解を理解できるように工夫しています。これまで受講してくれた学生からは「新たな視点でインタープリテーションを考える契機となり、その具体的な可能性を実感した」という感想もありました。今年度からは、討論やグループワークを加え、学生が主体的に参加する内容を充実させたいと思っています。

私の研究テーマは、エコツーリズムにおいて、ガイド従事者が自然保護や野生動物の保全に直接貢献する仕組みを構築することです。これまでの研究では、ガイド従事者へのヒアリング調査やアンケート調査に加え、ガイド従事者や関係者との信頼関係を築き、業務日誌や報告書等といった内部資料を分析対象とすることで、客観性のあるデータに基づく評価を実施してきました。

最近では、ライチョウ(環境省絶滅危惧種IB類)の保全に関する研究に取り組んでおり、登山ガイド従事者や登山愛好家から、学術的にも価値のあるライチョウの生息地情報を収集するための手法開発を共同研究で進めています。

また、昨年度からパラオ共和国を事例とした環境保全制度に関する研究も開始しました。観光者やガイド従事者の環境保全に対する費用負担への認識や態度を明らかにし、島嶼地域での持続的な観光のあり方を検討する研究を行っています。

和田茂樹

出身地：香川県
専門：生物海洋学

下田臨海実験センターで普段は勤務しています。授業は「モニタリング調査技術」と「海域フィールド実習」を主に担当しています。

自然保護寄附講座では、フィールドでの実務経験というものを重視していますが、「モニタリング調査技術」の授業では、どのように客観的かつ効率的なデータを取得していくのかを身につけていけるような内容を用意しています。また、「海域フィールド実習」では、普段目にしない海の中の自然をどのように解析していくのか、実際に伊豆半島の下田においてフィールドに出ながら体感していきます。

私の研究分野は分野横断的な内容なので、生物や化学、場合によっては物理なども関連する、一見するとわかりにくい分野ですが、生物海洋学という言葉が比較的しっくりきています。生物学の立場から、海を知るという学問分野と考えています。

色々な分野の研究を行っていますが、海藻の生態系における機能評価や、海洋酸性化の生態系への影響評価などを主に行っています。地球温暖化や海洋酸性化などの気候変動が深刻化していますが、海の生態系への影響というのはまだまだよくわかっていません。船舶観測・潜水調査・ラボでの分析など多岐にわたるアプローチで、現在の生態系の機能の解明や将来起こる生態系の変化の予測をしたいと考えています。

答え：保護対象=全種、駆除対象=全種、ヒトは・・・

【編集後記】事務局より

自然保護寄附講座が開講してから、丸1年が経ちました。思い返せばこの1年の間に、たくさんの出会いや、新しい発見がありました。

事務局のスタッフとして、いくつかの授業や実習に参加しました。一生懸命学び、たくさんのものを吸収しようとする履修生の後ろ姿を、すぐそばで見ることができたことは、私にとっても素晴らしい経験となりました。また、普段関わりのない他専攻の仲間と共に学び、共に過ごすことも、履修生にとっては大きな刺激になっているようです。

自然保護寄附講座の一期生となった履修生は、走り出したばかりのこのプログラムに、戸惑いや不安を感じることも多かったと思います。それでも誰一人としてギブアップすることなく、一緒になって自然保護寄附講座を盛り上げてくれました。

自然保護寄附講座のプログラムは、座学だけではありません。他の声をよく聞き、そして自分なりに考え、声に出すこと。そして、その考えを持って実際に現場に行くこと。そのすべてを一貫して学ぶことのできるプログラムです。将来は、自然保護寄附講座で学んだことを生かし、皆さん一人ひとりが持つ可能性を、日本のみならず国際的な場でも十分に発揮してほしいと願うばかりです。

二期生が新たに加わり、パワーアップした自然保護寄附講座に、どうぞご期待下さい！

事務局　遠藤響子

2015年5月18日発行

編　　集　自然保護寄附講座事務局

発　　行　筑波大学大学院自然保護寄附講座
〒305-0821　茨城県つくば市春日1-8-3 春日プラザ3F
筑波大学大学院　自然保護寄附講座事務局

問合せ先　nature@heritage.tsukuba.ac.jp
電話：(029)853-6344
FAX：(029)853-7099

編集協力　株式会社　アイネクスト

自然保護寄附講座ホームページ
http://www.conservation.tsukuba.ac.jp/